

台湾紀行メモランダ

式 正 英

1981年3月25日から4月3日まで10日間、台湾を一巡してみた。その梗概については、7月4日のお茶の水地理談話会で、「台湾紀行」と題しスライドを混えて話す機会を得た。以下にその折の話題を核として要点を記すことにする。

1. 旅行のアレンジ

台湾には日本から団体観光旅行客が目白押しである。筆者にとって公用でも会議目的でもない海外旅行は初めてであったが、御仕着の団体ルートに乗るのでは、余りにおぞましい。意外なことに入国事務手続きなどでは台湾は観光後進国であった。有効期間3ヶ月以内を余す旅券は使用できないので、新たに旅券の発給を申請せねばならなかったし、査証ももちろん必要であった。大陸との間の緊張関係から常に臨戦態勢にあることが、まずこの隣国を訪ねる際の戸惑いの原因となる様だ。

とも角、自主的なツアーを計画するために、張恵美（元研究生）氏の協力によって、台北の東南旅行社と連絡し、細目をくんでもらうことにした。日本の統治を経験したとは云え日本語は思っていた程には通じない。自由に旅行するには中国語を少々、英語を少々使うことが必要である。英語も決してオールマイティではない。言葉の制約を考えて、所々を欧米人向けの小団体ツアーを利用し、間を個人ツアーでつなぐ形で計画をたてた。

台北（2泊）—台北市内、北部海岸→（空路）花蓮→（東西横貫公路）梨山（泊）→台中→日月潭（泊）→台中（泊）→台中周辺→高雄（泊）台湾南端部→墾丁（泊）→台南（泊）→台北（泊）の順路をとったが、全行程を通じ天候にめぐまれ、すこぶる快適に過ごせた。花蓮から日月潭の間と台湾南端部が小団体バス・ツアーであったが、それなりに楽しめたし、概況を短時間につかむのには能率的であった。個人で動いた部分は、鉄道やタクシーを使ったが、ルートや行先地を自由に変更

できるので細かく見て歩くにはやはり好い。但し予備知識がないと収穫が少なくなる。台北では王月鏡（専攻科卒業生、台北市政府民政局副局長）氏、台中では林静嘉（張氏の友人）氏のガイドがあったので、此の点が補えたのは幸いであった。

2. 文化の重層と住みわけ

台湾の歴史は意外にも古くない。17世紀、明朝中期に福建省から漁民が渡台定住を始めるまでの漢文化の定着は明らかではない。1626年、澎湖島を占領、ゼーランディア城（安平）プロビデンスア城（台南）の拠点をつくったオランダ人は、同年、それまでに淡水のサンドミンゴ城に拠っていたスペイン人を駆逐したが、これも1661年、明の遺臣を称する鄭成功によって追われ、それ以降漢民族による組織的な開拓が始められるようになった。わずか400年に満たぬ歴史は、日本の肇国の歴史が2000年に及ぼうとしているのに比べて、大陸の海岸線との距離が100kmにも満たないだけに、不思議である。遺跡文化は台東付近で3世紀に溯るものが新たに発見された話しも聞いたが、原住民文化の起源については明らかではない。とも角、かつては平野に住む平埔族10族、山地に住む高山族9族が台湾全土に40万人ほども住みつき、漢文化の到来を拒絶し続けて来たものと思われる。組織的な開拓は清朝が統轄するようになった1683年以降、積極的にすすめられた。初めに閩南（ビンナン）系（福建省の漢族）が開拓をすすめ、おくれで粵（エツ）系（広東省の漢族、客家人ともいう）が來台、開拓に従事した。漢民族が次第に平野部を占居するにつれて、平埔族は山地内の盆地や台湾東部に移動させられるか、漢族へと同化させられ、初め20万の平埔族は200年の間に痕跡が明確ではなくなってしまった。

平野部を占める漢族にも大まかに特色がある。閩南系の家屋は屋根の棟木の両端が反り上がって

おり、粵系の家屋の棟木は真直ぐである。閩南系の占める土地は肥沃な沖積低地などであり、粵系は渡台の時期に残されていた相対的に土地生産性の低いラテライト質の赤色土におもわれた台地に住む。粵系は漢族のうちの20%に過ぎず、使用言語にも差異があり、漢族内部に微妙な関係をつくっている模様である。清朝は山地を原住民（その数20万人という）の保留地として手を付けずにしまい、日本はその統治時代（1895—1945）の50年間の前半をかけて、山地原住民の教化に専念した。もと高砂族と呼ばれ現在山地同胞と呼ばれる人々は、今もおもに山地に住み、中年以上は日本語を話し、読み書きをする、文化的には日本人なのである。最初に教わった文字言語が日本語だった訳で、日本は敗戦によってこれらの人々を山地内に置き去りにする結果になってしまった。

日本の統治期間は丁度50年間であり、その残したものは鉄道、道路、大学を初めとする教育機関などで、現在の台湾の近代的科学的諸施設は日本のつくったものに基礎をおいているように見受けられる。終戦後、台湾は国民党政府に接収されたが、1949年、共産党との戦いに敗れた同政府は台北に首都をおくことになる。その折、大陸から軍人など100万人、家族を含めて200万人が来台した。これらの人々を近期移民と称する。台湾の人口は現在1700万であるから、大規模な漢族の民族移動が、つい最近にあったことになる。近期移民はおもに都市部に住み、社会的上層支配階級や管理的地位にある者が多く、退役軍人の一部は山地の開発に従事し山地内部に住んでいる。彼等は北京語のみを話し、日本語を好まない。上述して来たそれぞれの民族文化が重層して現在の陽気な活動的な台湾社会をつくっている訳だが、一方で社会的、地域的な住みわけの見られることに注目しておきたい。

3. 土地利用の特色

大まかに山地が森林、平地に耕地、とくに水田の多いことは日本と同様であるが、耕地の作目は地域的にはっきりと特化している。例えば、さとうきびは夏季少雨の台中より南端までの地域に、

湿気の必要な茶は台中より北の部分や山地内の盆地に栽培される。パイナップルは彰化から高雄の間、バナナは台中の東から下淡水溪までの間に分布し、アヒルの飼育地は殆んどの河川沿いに条状に分布している。終戦の時期までに既に地域特化の傾向はみられたが、現在ほど截然としたものではなくパイナップル畑などが台北周辺に混在していたという。適地適作を奨励する政府の指導があって現在の土地利用がみられるようになった。

南端部は熱帯サバナ気候の上に、地形は陸起珊瑚礁の海岸段丘なので乏水性と云ってよい。300mに近い最高位の亀子角段丘とこれを取りまく数段の段丘上には、墾丁公園や墾丁牧場がある。これらは日本時代の林業試験場や畜産試験場の用地や施設を巧みに存続利用して来たものである。戦時下の日本としては、当時の領土内にもとめられる唯一の熱帯気候区であるこの地域に、南方に発展した場合に備えて熱帯農業技術確立のための試験場をあえて設置したものであると思われる。墾丁公園は正式には林務局墾丁森林遊楽区熱帯林園で、800種もの熱帯植物が自然のジャングルや植栽地にみられ、実験林と行楽地を兼ねている。放牧場の草地との境には墾丁賓館と称する省立のホテルがあって、観光客の便宜に備えている。墾丁牧場は台湾省畜産試験場恒春分所で、台湾の他の場所には殆んどみられない人工草地の放牧場が広がり、多数の乳牛や肉牛が飼育されている。潜在自然植生がジャングルである場所に、通年牧草を維持している様子は興味深い。

東西横貫公路はタロコから東勢まで192.8kmの延長だが、国の建設事業の目玉であり、46ヶ月かゝって1960年に完成した。台湾の開発にとっての地形的障壁は何といっても、その東側に面積4分の3を占める台湾山系であり、とくに南北につらなる高度の大きい中央山脈である。蒋介石政権は退役軍人にジョブを与えることも目的で、山地の開拓にのりだし、高所に温帯性果樹畑の大規模団地をつくるのに成功した。合歡越え（大禹嶺2565m）の西、大甲溪の源流部の横貫公路に沿う梨山（1945m）がそれである。大起伏山地の頂稜とそれにつよく斜面の原生林は、この事業によって見

事に大規模な果樹農園へと交代し、ナシ、リンゴ、モモ、アンズ、クルミ、クリ、ビワなどを産し、斜面はナシの花盛りであった。付近の地質は結晶片岩のために脆く、緩斜面も広がるが、かなりの急斜面までもものともせず、樹園地が開けている様は、俤観でもあり奇観でもある。梨山周辺の海拔1500mから2500mまでの斜面がすっかり果樹農園となってしまっている。もともとはタイヤル族の小集落が分散していたが、その土地利用権を政府の莫大な投資によって買収し退役軍人に売却して開拓をすすめた。タイヤル族も新しいコンクリート建の家に住み物質的に恵まれた生活を営んでいる。横貫公路に沿う開発には瞠目すべきものがあるが、梨山や德基水庫（発電用ダム）周辺にみられた脆い岩質の急斜裸岩地の状況は、土地保全上かなりの問題をひき起こすのではないかと感じられた。

台南の付近から南部の枋寮に至るまでの海岸線は砂浜の隆起海岸で、海岸外州の発達が顕著であり、遠浅である。この地形を利用して淡水魚から鹹水魚に至る各種の養魚池が臨海部に連っている。サバヒイ、カニ、エビ、ウナギの養殖が盛んで、大量のウナギが日本にも輸出されていると聞いた。この付近の養魚池は300年来の伝統を持つ。おそらく福建省からの漢文化の移入と共に渡来したもので、日本の臨海養魚池の歴史が明治以降である

のに比べると大変な差異である。日本の養魚について大陸からの影響を軽々に論ずるのは危険だとしても、干拓や塩田の技術の伝来と臨海養魚池とは切り離せないものと思われる。

4. おわりに

台湾は自然地理学的にもきわめて興味深い。この小文では紙数の関係で触れられなかったが、いづれ稿を改めて発表したい（一部については口絵参照）。台湾には仏寺や民間信仰の媽祖廟を始め道教、儒教の廟が各地にあって信仰心の篤いことが知れる。万世師表の孔子を敬う礼節の国であるから、日本が敗戦で失った精神的な部分がこゝには息づいていて何ものにも換え難い思いがする。大陸の中国ではもはや見られなくなったと思われる古い漢文化や三民主義が台湾には生き続けている。それだけでも行って見る価値があるう。何よりも有難いのは日本人に対し友好的なことだ。台湾の人の日本に対する親味な暖かさは富田芳郎氏の著述からもうかがい知れる。

参考文献

- 富田芳郎（1972）：台湾地形発達史の研究 古今書院
張基昀主編（1962）：中華民國地図集 国防研究院
鈴木明（1980）：高砂族に捧げる 中央公論社
陳国章・王元田（1969）：嘉義県におけるサバヒイ養殖
地理14巻4号